

---

## 卷頭言：モノを描く

上峯 篤史

何か気の利いた卷頭言を書かねば、と小一時間ほど Enter と Back space の上を往来していたら、ふいに研究室のドアを叩く人があった。指導下の学部生で、石器の実測の最中に考えが詰まつたので意見を聞きたい、と申し出ってきた。差し出された石器と実測図を一瞥して所感を述べてみたが、なかなかに手強い。なにせ相手は何時間もその石器と対峙してきた、言わばその石器の親友のような御仁だ。経験則を盾に取ったコメントや感覚に訴えるアドバイスではとうてい納得せず、容赦のない質問が返ってくる。それならば、と襟を正して、眼前の石器が見せる微細な痕跡と私の思考過程とを丁寧にたどりながら説いてみて、ようやく理解してもらえた。その学生は参考に示された文献をむさぼるように繰ったあと、石器と実測図を大事そうに抱えて、満足気な表情で帰っていった。その姿が羨ましく思え、私もじっくり描いてみたくなった。

実測とは、考古学の文献に載っている線画、すなわち実測図を作図する作業のことである。あれは方眼紙の上に据えた遺物を、文房具を駆使して計測しながら描いている。石器実測においては、外形線（輪郭）を描いたのち、石器を構成する割れ面の一枚一枚を形状と重複関係を考えながら図化していく。割れ面の重複関係は、各面の形成順序と対応する。それからすべての割れ面に、割れの方向の判読結果と面の凹凸を表す波紋や亀裂を描く。すなわち石器実測は、それがどのような素材を用いて如何なる手順で製作されたのかを判読し、その所見を図化したものである。それは作り手の両手の動きであり、文化伝統と試行錯誤のジレンマであり、実測者にとっては点の記にも似る。

本学でも開講している考古学の実習講義では、からず遺物の実測法を教える。土器のような器状のモノと石器のような平たいモノとでは実測の方法が違うため、授業では両方を学ぶ。計測や作図の手順は難しくないから、授業時間内で十分に習得できる。いっぽう遺物の材質によって観察の視点や方法が違っていて、その表現方法も異なる。実測には言わば語学のような側面がある。遺物を読みなければ、遺物と語らえなければ、実測が単なる線引きになってしまう。しかし観察に精通するのを待っていては一向に描き始められないので、とにかく描きながら学んでいく。見えない、知らない、習っていないのオンパレードで、たいていの学生はしつこい印象を懷いて実測の授業を終える。これを自分のものにできるかどうかは各自の研鑽にかかっているから、志のある人はとにかく遺物と向き合って、実測経験を積み重ねていくしかない。

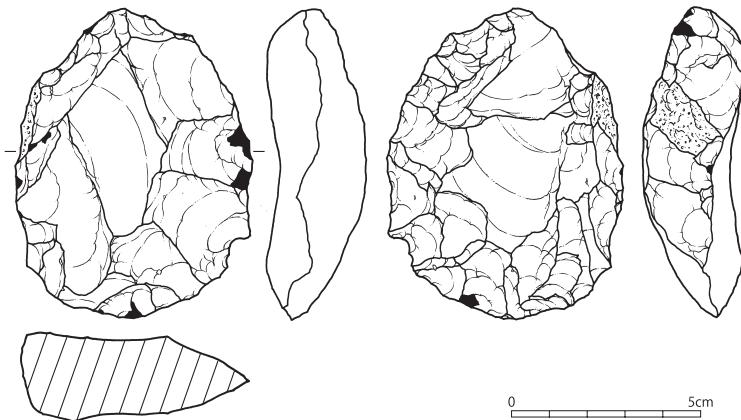


図1. 石器の実測図

図1には、石器の実測図を載せた。石器の実測図では、三次元の物体を二次元上で表現するため、遺物を90度ずつ動かして複数の投影図を作る。正投影図第三角法という工業用図面の規格に則っている。左下に示したのは断面図で、投影図では表せない情報、たとえば刃部の角度や各割れ面の交差角度、断面図中に斜線で示した石理走向（岩石の流理構造の向き）を伝える。実測のあとは、漫画家さながらの道具を使って、手作業でカリカリとペン入れして仕上げる。この図は私が半日を費やして作図したものだ。実測図を見ればその人がどのくらいの観察眼をもっているかがわかる、とも言われる。つまりこの図のせいで、同業者には私の夜郎自大ぶりが少なからず悟られている。何とも恐ろしい話である。

そんな面倒はやめて写真で十分ではないか、そのほうがずっと正確じゃないか、という声もしばしば聞こえてくる。またこの頃は3Dスキャナが普及ってきて、考古遺物の3Dモデルも見慣れてきた。写真はその名のとおり、遺物の形状や表面状態に関する情報を客観的に示しつつ、そこに多少の表現が加わる。露出やライティングを工夫すれば、ずいぶん違った雰囲気の写真になる。一方で3Dモデルは、遺物表面の緻密な測量データの集合で、機器操作に工夫の余地はあれども、得られるモデルの再現性は高い。機器が高額で、私が使っているものでも写真撮影機材の倍ほどするが、操作に習熟するには数時間もあれば足りる。3Dモデルの取得に要した時間は写真撮影よりやや短く、実測図作成の20分の1くらいである。紙面の都合から、図2には3Dモデルを実測図風の投影図にして載せているが、おおもとの3Dデータをクルクルと回しながら観れば、割れ面の重複関係や割れの方向も判読できそうだ。石器の輪郭、割れ面の位置や凹凸といった情報の正確さにおいては、実測図よりも写真や3Dモデルに分がある。

すでに気づかれているとおり、私は研究に関わる諸作業のなかで石器実測が大の好物で、この文章も多分に実測びいきに書かれている。改めて強調しておきたいが、実測図は写真や3Dモデルでは代えられない。実測図に込められた情報のうちで最も重要なのは、作図者の

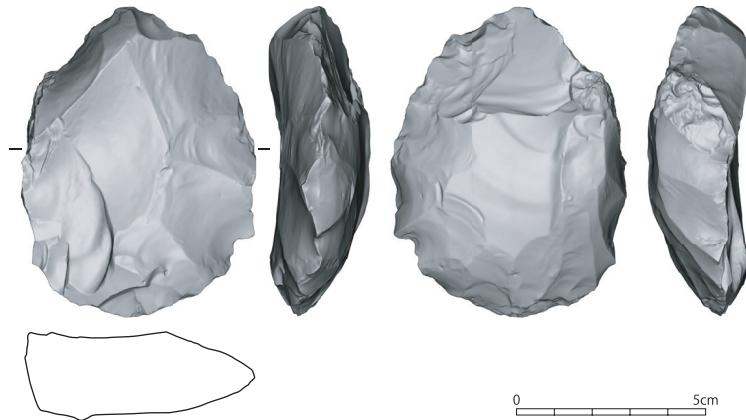


図2 石器の3Dモデル

観察所見である。例示した石器は、石理に逆らってやや強引に剥離された石片を手に取り、短軸を基軸として表裏を入れ替えつつ、石器を時計回り、反時計回りと交互に回転させながら、縁辺に打撃を加えて刃が付けられている。私がそのように考えたことは、文字に起こさずとも、石器実測を習得した人なら実測図から読みとれる。実測図が、私の観察所見とのおりに描かれているからにほかならない。観察所見の含有量では、実測図に軍配が上がる。

実測の利点はその成果物のみならず、作図の過程にもある。遺物をじっくり観察して、得られた情報を束ねながら図に表していく作業は、実証的な考古学を志す人にとってこの上ないトレーニングになる。また、実測は研究の戦略としても有効である。ここしばらく、私は研究仲間と毎年のように中国に出かけ、北京や石家庄で旧石器を調査している。その作業はもっぱらに実測である。2週間くらいは滞在するのだから、色々な石器群を俯瞰して回ればさぞかし派手な論文が書けそうなものだが、どうもその手の仕事には気乗りがしない。映画のクライマックスだけを拾い見しているように思えて、気持ちが悪いのだ。そこで石器群を一つずつ資料化していこう、となる。滞在中のほとんどを1石器群の徹底実測に費やし、実測図でいっぱいになった角2封筒を大切に抱えて帰国する。彼の地で観察する石器は割れの痕跡がとらえにくい石英製のものが多く、製作者が現生人類ではないものもふくまれる。とにかく日本国内の石器を相手取って蓄積した経験則が、無力とは言わないまでも頼りにならないから、広く浅く眺めても実体には届かない。そんな時こそ実測だ。

こんなこともあった。以前、縁があつて青森県金木の砂礫層から出土した偽石器の実測に明け暮れた。1950年代に日本最古の石器群の三日天下にあった、著名な石ころたちである。自然の産物であることを知りつつも、実測してみると人工品さながらの「加工痕」に驚き、またそれらが、人の手によるものとみるには首をかしげたくなる割れ面と共に存していることに気づいた。それらの形成順序をたどってみても、作業のねらいが聞こえてこない。描き上げた実測図の山が高くなるにつれ、かつて研究者らに夢を見せ、悩ませたのはこれか、と考えがまとってきた。

石器を一つずつ、割れ面を一枚ずつ、亀裂を一本ずつ読み解きながら、それを図に表す。馴染みのない石器や不可解な石器であっても、実測図が描きあがる頃には何らかの答えが出ている。少なくとも、何がわからないのかははっきりしてくる。石器実測は研究法であり、石器から引き出した所見を情報化したものが実測図なのである。遺物と何時間も語らって、時にはにらみ合って描かれた実測図は、膨大な情報を内包している。たとえそれが誤解や曲解をふくんでいたとしても、作図者の研究結果として存在感を放つ。それは研究資料として、または格好の批判対象として、学問の礎を築くはずだ。これを皆が徹底していたら、石器の年代を一桁か二桁読み違えていることに気がつくのに、20年近くもからなかつたようにも思う。

オンラインで公開される英文ジャーナルでは、石器は写真で示されることが多くなっている。3D モデルもずいぶん身近になってきた。卒業論文や修士論文はおろか、次々に発表される若手研究者の論文でさえも、発掘調査報告書に並んでいた誰かの実測図の転載で埋め尽くされている。近頃は効率のよい仕事を求められもするだろうし、埋蔵文化財業界の実測図の質も向上しているのかもしれない。しかし、少なくとも研究の舞台では、それで満たされるはずがない。そこには自分の声が反映されていないからだ。主観的な意見を明示せずして何が人文学だろうか。自分が表現したいもののすべてが既存の図に表されていることなど、そうそうないように思う。

先に実測図を掲げた石器は、私が奈良県香芝市桜ヶ丘第1地点遺跡で2007年に採集した、サヌカイト製削器である。灰黒色の滑らかな器面を見せ、植物根に由来するのだろう錆色の付着物が堆積環境を物語る。これは今朝までは何のことではない単なる採集品だったが、こうして図化されてようやく目の目を見た。研究資料になったのだ。ここまで綴ってきた小文は誰の目にもとまらないかもしれないし、読まれてもすぐに忘れられるだろう。一方で実測図は声が大きいし、なにより長生きだ。十年以上たってから、誰かの閃きの種になることもありますないことではない。少なくとも本誌を手に取った若者たちに、ちょっと実測してみようかな、と思わせるくらいはできるかもしれない。